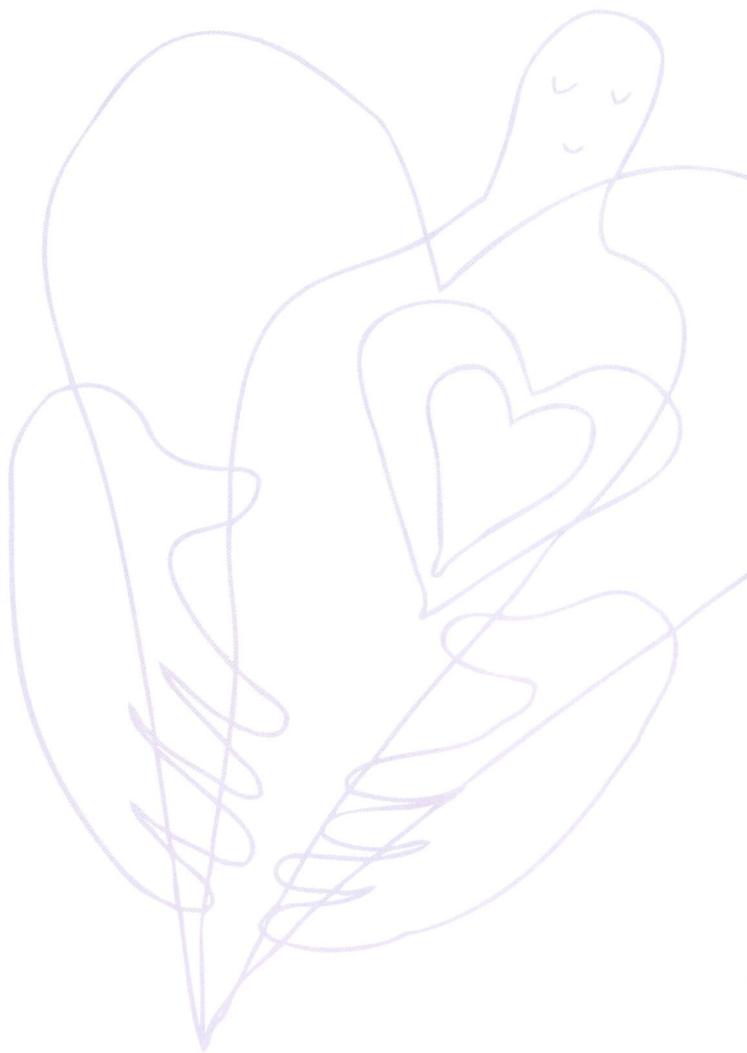




文部科学省私立大学
戦略的研究基盤形成
支援事業採択



猛暑がさり、過ごしやすい秋冷の季節となりました。

いかがお過ごしでしょうか。

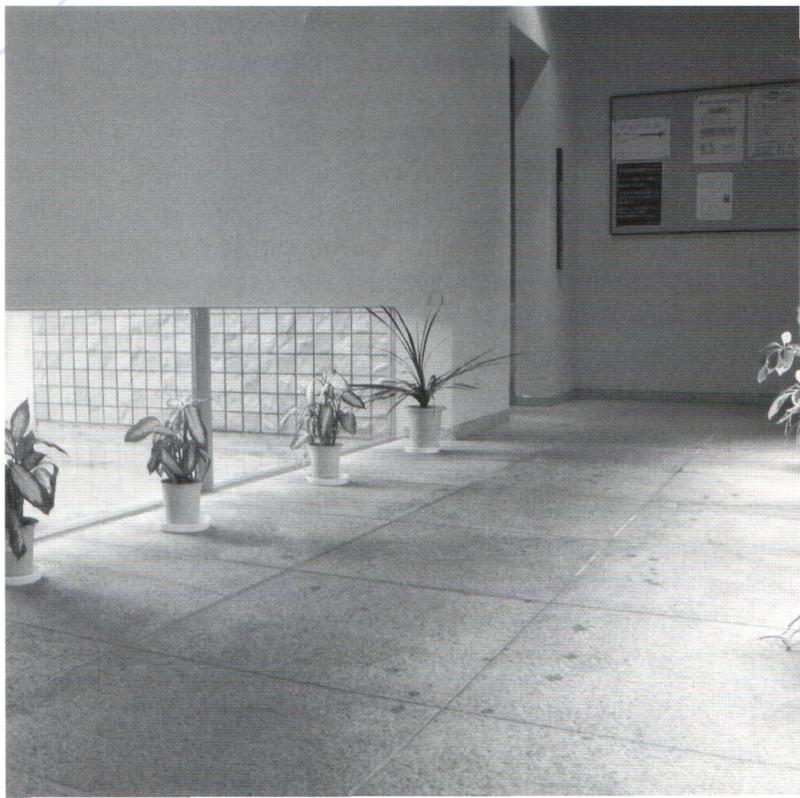
おかげさまで、研究所主催の公開シンポジウム

「父親の子育て 母親の子育て」は、盛況のうちに終えることができました。

シンポジウムの成果は当研究所の紀要『心の危機と臨床の知』vol.12に収録する予定です。

今回のニュースレターは、研究所が他の機関と共催で行っている子育て支援事業を特集いたしました。

ご味読ください。





活動報告

人間科学研究所は心理臨床カウンセリングルームと共催して発達障害、または発達障害と類似の困難を持っている小学校5年生から中学校3年生までの子どもとその保護者を対象とした、思春期発達支援事業（愛称：フレンズクラブ）を行っています。子どもと保護者はそれぞれ別の部屋でグループワークを実施しています。子どもグループでは、参加者一人一人にサポーターと呼ばれる大学院生が付き添い、苦手な対人スキルを補いながら活動しています。保護者グループには1～2名のファシリテーターが入り、発達の勉強や保護者自身のストレス軽減を目的としたワークなどを行っています。1期10回の活動を、前期、後期でそれぞれ1回ずつ、年間2期開催しています。

本事業はこの秋で開始から5年が経過しました。これまでに16組の親子が参加し、数十人のスタッフがかかわってきました。はじめて参加した子どもは周りの子どもを気にしながらもなかなか近付けなかったり、自分のやりたいことを優先してしまい、仲間で楽しむためのルールを守ることができなったりします。また、お兄さん、お姉さんのようなサポーターとの関わりだけで満足する子もいます。そんな子どもたちもサポーターに促されて遊びの輪に入り、その場を楽しむための暗黙のルールをわかりやすく指導してもらいながら、徐々に主体的に同年代の仲間と関わるようになります。そんな様子を見ながら、5年前、当時のスタッフと「公園デビューみたいだね」と感想を分かち合ったことがありますが、年々その思いは強くなってきています。

参加当初の子ども達の様子は、幼児期に友達に関心を示さなかったり、興味の転導性が高いため落ち着いて友達と遊べなかったりと、仲間と協働することに関して成功体験をあまり積めないまま成長することと関係しています。そんな彼らも思春期になると、自然に周囲の友達同士がもっているような同年代の仲間との対等な関係への欲求を持つようになりますが、方法がわからない為に満足させることができない状態に陥ってしまいます。せっかく出現してきたこの成長促進的欲求を適切に満たすためには、特定の人物に守られた状態で、対人スキルを教えられながら仲間と関わる体験をすることが望ましいのです。しかし、思春期らしい矜持は順調に育てている子どもたちなので、本当の公園デビューのように母親に守られている姿を友人に見られることには抵抗があります。フレンズクラブで、少し年上の、大人としてのモデルの機能も持つサポーターが「特定の人物」として機能することで子どもたちは、安心してこの欲求を満たしているのではないのでしょうか。

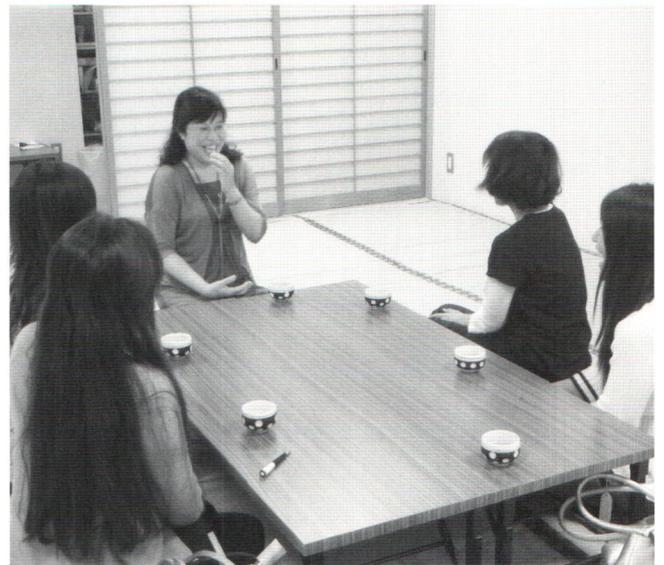
一方、保護者グループでは、自分の働きかけが思ったように子どもに届かないもどかしさを感じながら、子どもと適切な距離がとれないまま子育てに奮闘してきた様子が語られます。親子は同じ建物内のお互いが目に触れない場所で活動していますが、この距離が思春期の親子にはほどよい分離として作用しています。保護者は、ここに来ている間、子どもを自分の代理であるサポーターに任せることで物理的には子どもと離れながらも、近くにいる子どもを思い描いて、子どものことを語ったり、自分の子育てを振り返ったりしています。時には、愚痴をこぼしたり、アドバイスをしあったりと、砂場で子どもを遊ばせながらの井戸端会議という、子どもの相応年齢の時には積みについた体験をしています。

デビューがうまくいかどうか育児ストレスとなるマイナス面があることから、公園デビューという言葉はすたれつつあるかもしれませんが、そういった社会的意義ではなく、親子の内的体験という側面から考えると、フレンズクラブで子ども、保護者ともにサポーターを媒介として守り守られながら、公園デビュー的体験をしているようです。

思春期発達支援事業 フレンズクラブ

思春期の公園デビュー

—思春期発達支援事業の5年を振り返って—



保護者グループの様子

企画：南野 美穂

開 期：年間2期 5～7月・10～12月
各期10回期間中の毎週水曜日

場 所：18号館2階 演習室1

カウンセリングルーム集団療法室

共 催：甲南大学心理臨床カウンセリングルーム

多くのスタッフの熱意に支えられて今まで続けてきた活動です。今後は、より具体的なスキルを身につけるためのアサーショントレーニングも導入する予定であり、その時々の子どものニーズを的確に把握して参加者とともにより良い方向へ進んでいきたいと思っています。

(南野美穂)

子育て支援事業

うりぼうくらぶ・親子相談・

子育てサークルまつぼっくり・プレイグループどんぐり

育ちあう関係

—臨床心理士による子育て支援—



うりぼうくらぶ準備風景

企画：池内 まり

開期：

「うりぼうくらぶ」 第2・4（火）11：00～12：30

「親子相談」 第2・4（水）10：30～12：00

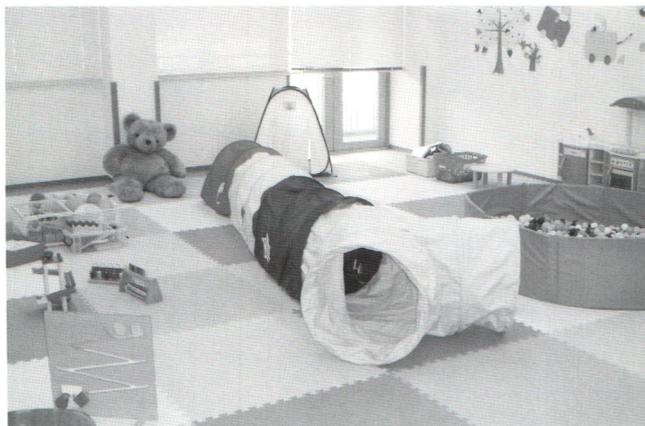
「子育てサークルまつぼっくり・プレイグループどんぐり」

年間2クール（前期・後期各5回）

（水）10：30～12：00

場所：18号館3階 共同研究室I、演習室3

共催：甲南大学心理臨床カウンセリングルーム



室内の様子

六甲山系の緑を借景にして建つ、水庭の反映が美しい甲南大学18号館の一室で、地域の就学前の親子が集う子育て支援グループを開催しています。落ち着いた空間、清潔な室内に精選された遊具。資源を最大限に活用した環境で、共催の心理臨床カウンセリングルーム相談員と大学院生を中心に「うりぼうくらぶ」、「子育てサークルまつぼっくり・プレイグループどんぐり」、「親子相談」という、それぞれに特色のある活動を行っています。この活動は、地域のなかに親子の居場所を作ろうと、松尾恒子名誉教授のご指導のもと2001年に始まりました。開設当初に比べると、近隣に乳幼児期の親子の交流の場は増えてきましたが、「うりぼうくらぶ」ほかグループに参加する親子の人数はほぼ変わらず、活動は10周年を迎えようとしています。この間、臨床心理学の知識や技法が地域の子育て支援にどのように貢献できるのかを探ることが活動の趣旨の中心にありました。

近年、加害者、被害者としての子どもをめぐる事件が報道されるたびに、子どもの養育環境や親子関係のあり方が社会的な関心事として取り上げられます。子どものこころが見えにくくなっている現代社会の不安を背負い、子を産み育てる養育者の負担感は増すばかりです。

また、もうひとつの流れとして、子どもの「発達障害」が多方面で注目されるようになり、「関係のもちにくさ」にこころを悩ませる親子が増えてきました。これらを背景にして、子育て支援に「関係」の専門家である臨床心理士の専門性が発揮される可能性はますます大きくなると予想されます。では臨床心理士に期待される子育て支援とはどのようなものなのでしょうか。

子育て支援グループは、親子の心地よいふれ合いを支える場です。当事業では親子が取り組みやすいふれ合い活動を用意し、ほどよい距離でスタッフが見守ります。「ほどよい距離」は親子によって異なり、また時間とともに変化していきますので、スタッフは流動的にかかわり、親子が安心して「関係」に支えられることを大切にしています。ほどよい関係を経験した親子は、「育つ」力を発揮し、自信をもって地域活動に開かれていきます。乳幼児期の心地よいふれ合いの体験は、予防的な側面を併せもっているのです。

次に、子育て支援グループは子どもや養育者を理解する場です。専門的な検査や面接の技法を用いているような面から親子を理解し、それをもとに養育者への助言や子どもへの援助を行います。不登校やニート、ひきこもりなどの社会現象を考えると、今後は思春期、青年期を含めてより長いスパンで発達を捉えた支援が必要とされるでしょう。当事業では、新たに学童期グループを開設して、親子の今日的な課題に取り組んでいます。

また、子育て支援グループは家族支援の場です。当事業でも親グループを作り、家族の育ちをサポートしています。2010年10月20日（水）には松尾恒子名誉教授による子育て講話会を開きました。そのなかで、「今、起きていることよりも、どのように感じているかに心を向け」、「今—この時、この場を生きること」が子育てではないだろうか」とご講話いただきました。「この時、この場」を対象とすることは、臨床心理士の領域のひとつであり、感情体験を支えるということは、家族支援を考えるうえで重要な視点になるでしょう。

親子が育つ・育てることの間にある問題は複雑に絡まり、簡単にひもとけるものではありません。社会全体を見つめる視点を持ちながら、子どもの、まだ形を成さない思いをすくいと、養育者のこころの奥深くにこころを寄せて、ひとつずつゆるめていく営みです。しかしこの手作業こそ臨床心理学の専門分野であり、またこの手作業が子育て支援事業のなかに位置づけられるよう、10年間の活動で得た知見を地域のネットワークにつないでいきたいと考えています。

（池内まり）

これまでの活動

公開研究会

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

第53回公開研究会

「芸術療法と芸術学の対話」

第2回 アートセラピーにおける表現と癒し

日時: 2010年8月7日(土) 14:00~18:00

会場: 甲南大学18号館3階 講演室

研究報告:

「音楽はひとを癒すのか—癒しブームから音楽療法を考える—」

高岡 智子 (甲南大学人間科学研究科博士研究員/音楽史)

「ジャクソン・ポロック<心理分析的ドローイング>をめぐる諸問題」

市来百合子 (奈良教育大学教育実践センター准教授/臨床心理学)

第54回公開研究会

「芸術療法と芸術学の対話」

第3回 アートセラピストに聞く

—11のインタビューから見る芸術療法の諸相、芸術学との距離—

開催日: 2010年10月2日(土) 14:30~18:00

場所: 甲南大学18号館3階 講演室

講演者:

石原みどり (姫路市医師会看護専門学校非常勤講師/美学・芸術学)

宮川貴美子 (甲南大学文学部非常勤講師/臨床心理学)

これからの活動

研修会

第3回 思春期発達支援研修会

「タイトル未定」

開催日: 2010年12月3日(金)

場所: 甲南大学18号館3階 講演室

講師: 田中 究 (神戸大学/臨床心理学)

企画: 南野 美穂 (甲南大学/臨床心理学)

司会: 南野 美穂

対象: 教育学・心理学を学ぶ学部生および大学院生

心理・療育・教育関連領域に携わる専門家

公開研究会

プロジェクト2. 育てる関係の危機と子育て意識の多相性についての研究

第55回 公開研究会

「『イクメン』の向こう側へ—臨床心理士による父親への育児支援の可能性—」

開催日: 2010年12月10日(金)

場所: 甲南大学18号館3階 講演室

講師: 菅野 信夫 (天理大学/臨床心理学)

企画: 高石 恭子 (甲南大学/臨床心理学・学生相談)

参加費無料・参加申込不要

発行年月日: 2010年11月10日

編集後記

KIHSの第三期の活動も早いもので折り返し地点を迎えました。

これまで積み重ねてきた研究の成果をさらに深化させるべく、研究員一同努力していく所存でございますので、今後ともご指導・ご支援のほどよろしくお願いいたします。

